

戸川幸夫動物文学全集

2

戸川幸夫動物文学全集

2

講談社



戸川幸夫動物文学全集2 人喰鉄道ほか

昭和五十一年六月十八日 第一刷

著者 戸川幸夫

装幀者 辻村益朗

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁十二番二十一 郵便番号一二二
電話東京(〇三)九四五一一(大代表) 振替東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

©戸川幸夫 一九七六年 Printed in Japan

目次

人喰鉄道 5

オホーツク老人 283

笑う奴 318

黒い背鰭 346

解説・尾崎秀樹 360

人喰鉄道

鉄 の 蛇

モンバサは、正確にいうなれば、インド洋とアフリカ大陸の接点にある小島で、狭い水路によって東アフリカ本土から分離している。

島と同じ名のモンバサの町は、一四九八年に例のバスコ・ダ・ガマが船を乗り入れた港として知られ、その後、二百年にわたるポルトガル人とアラブ人との抗争の地でもあったのでキシワムビタ（戦いを好む所）という古い地名がつけられていた。

昔からウガンダへの入口として、また内陸部への交易港として重要な役目を果たしてきたが、しかし本当に良い港は島の反対側、モンバサ市から三哩（四・八キロ）のところに在って、キリンディニと呼ばれている。それはへ水の深い所」という意味で、町はマンゴーやバオバブや、バナナやシュロの濃い緑の森に覆われていた。

英国が東アフリカを保護領として宣言をした翌年の一八九六年の夏、このキリンディニの港から一匹の鉄の蛇が這

いだした。鉄の蛇はのろのろとはあったが、着実な足どりでケニヤの首都ナイロビに向かって北上していった。夏が去って冬がきた。そしてまたも夏が訪れて冬となった。

一八九八年の早春までに、鉄の蛇は体を伸ばしてモンバサ島と本土の間に横たわるマキユバ海峡を渡り、ラバイの丘に登り、細くて赤い砂土に覆われたおそろしく単調なタール砂漠を横切ってへ荒地の子供たち」という名のワ・ニカ族のマウングの森を通り、ボイからワ・タイカ族の支配するタイタ高原を左に、ムタンダの岩山を右に見て、海岸から百三十二哩のサボ川のほとりに到達していた。

それは暗黒大陸といわれるアフリカに文明の曙光を投げかけんとするウガンダ鉄道の建設だった。

鉄道は第一期工事の計画としてモンバサ港とナイロビを結びつけることになっていた。サボの駅はもちろנםまだ出来上がってはいなかったが、駅の予定地にはレールや枕木やコンクリートの桁材が積み重ねられ、さらにそれらの建設材料をつんだトロツコやそれを曳っぱる小さな機関車がとまっていた。測量器具やウインチやロープやシャベルやツルハシなども雑然と散らばっている。一メートルほど高く盛られた土の帯が続いていた。路盤であった。路盤はボイの方からやってきて、さらに三百メートルほど先まで伸びていたが、路盤の上で枕木を固定させるためにまく道床バラストは、駅の予定地の少し先までしか置かれてなく、

従つてレールはここで切れていた。つまり一年半かかつて這いつづけた鉄の蛇の頭部がここのであつた。

その頭部を中心としてたくさんキャンブがばらばらに建てられていた。中央の青い大きなテントは建設工事事務所にあてられていた。その隣りが所長のハルスレンのテントで、彼のテントにはモンバサから遊びに来ていた末の妹のミッシェルが泊まりこんでいた。

ハルスレンは三十を一つか、二つ越していたがまだ独身だつた。英国陸軍の将校として大尉まで昇進したが、ある年の演習で馬もろとも崖から転落し、ひどく足を傷つけてしまつた。そのために陸軍を退いて、ウガンダ鉄道の建設委員となつてここに赴任してきていた。しかし、彼の軍人としての勇猛心は少しも喪われてはいなかつた。工事責任者としてもうつてついで、彼はここで働いている千人のインド人労働者や三千人近いアフリカ原住民労働者を威服し、かつ彼らの信頼をかち得ていた。彼の事務所にはヒーブナー、ファウル、ホワイトヘッドという三人の白人技師が居り、技師長は年配のブルックだつた。技師の下にはインドから連れてこられた数名のインド人の監督員が配置されていた。彼らは本国で鉄道工事に関係したことのある経験者で、スプリーナー、バレンチ、カリムバックスその他だつた。このほかにハルスレンが信頼できる者として特に眼をかけていた者が二人いた。二人ともアフリカ人で、一人はワ・タイカ族に属するウンガンシークという土工頭で

あり、もう一人はム・カンバ族のヘラシングという石工頭だつた。ヘラシングは毒矢づくりが上手であつた。それは彼が属するム・カンバ族の伝承によるもので、家の周囲に植えるナナという野草の実からつくり出す毒を手製の矢に塗るのだ。

ウンガンシークには、そんな器用な技はなかつたが山岳種族だけに頑丈で、力が強く、勇敢だつた。一メートル九十センチという巨大な肉体の持主だけに誰と格闘しても負けたことがなく、三千人のいろいろな種族の混りあつたアフリカ人土工部隊を押えるにはもつてこいだつた。

二ヵ月あとに大雨季が迫つていた。雨が来る前にサボ川の架橋だけは終えておかなければ、その後の工事に支障をきたすので工事は急がれていた。しかし、どんなに急いでいても、野獸の多いこの地域では夜の作業はむりであつた。

人夫たちは、太陽がキリマンジャロ山の肩に傾きはじめるともうさつきと作業を中止して晚めしの支度にとりかかるのだ。

樹木の影が長く伸びて、暑かつた一日が終わろうとしていた。と——そこへ五十頭ほどのロバの一隊が到着した。乾いた土埃がロバの群を包んでいた。

ロバを率いているのはインド人の隊商で、彼らはもうこの連中とすっかり顔なじみになっていた。インド人や、アフリカ人や、アラブ人たちが必要とする、または欲しが

るような物をロバの背につけてはるばるモンバサからやってきたのだ。モンバサからは、主な食糧や生活物資は汽車で送られていたが、四千人からの労働者の要求を満たすことはとうてい出来ない相談だったから、こうした隊商の時の訪れは有難かった。

隊長のダルカンスはハルスレンやブルックたちに挨拶したあとで、事務所のテントの傍で店開きをした。

「ここにくる途中で、みごとな鬣をもった大きな牡ライオンを見つけてな。一発射ったが逃がしてしまった。日ぐれどきでなければ追っかけていって、立派な敷皮をつくったんだが惜しいことをしたよ。」

あれだけの奴あ、ライオンの多いこのサボでもめったに見られない逸品さね」

ダルカンスは集まってきた連中に自慢げに言った。

「で、そいつに中ったのかい？」

石工頭のヘラシンギがたずねた。

「中ったとも、鬣の毛がぱっと散ったから首すじか肩に命中してるさ」

「掠ったかもしれないぜ」

「いや、その場所まで行ってみた。するとひどい血が流れていた。だから重傷を負わせたことは間違いない」

「そんなら……」

とヘラシンギは続けた。

「明日朝、追跡して仕とめてくるだな。でないと手負いラ

イオンは仲間と言いつけて、仇をするようになるから……」
ヘラシンギの心配を、そこに集まった労働者たちはにやにやしながら聞いていたが、

「またヘラシンギの取り越し苦労が始まった。ここには四千人からの人間が集まってるんだぜ。いくらライオンでも近よれねえさ」

工事監督のカリムバックスがこともなげに言ったので、どつと笑いどよめいた。たしかにサボはライオンが多い。しかしながらライオンが人間を襲ったことはまだ一度もなかった。

人間はライオンを殺そうとしなかったし、ライオンの方も人間を殺そうとしなかった。人間はライオンが縞馬やウシカモシカ（ワイルドビースト）を襲って殺し、争って喰っている光景を嫌になるほど見てきたし、ライオンも多勢の二本足の連中が群がり集まって何かをやらかしているのをブッシュの中からじっと眺めていた。だが人間もライオンも自分たちの邪魔にならない限り相手を犯すべきものでないと知っていたので、両者の間には奇妙な友情のようなものがあつた。

その友情の均衡をダルカンスが破ったのだ。ヘラシンギは、これまで保たれてきた人間とライオンとの間の平和が、彼の軽率さで破られるのを恐れた。そこでもう一度くり返した。

「怪我をしたライオンは、その口惜しさを仲間に訴えるだ

よ。そして仲間が仇を討ちにくる。

だから、お前が傷つけたライオンが、仲間に告げ口する前に殺すだな。こっそりと……こっそりと……」

ヘラシシギは、本心からそう信じこんでいた。彼と血を同じくするム・カンバ族の労働者たちは、彼の言を信用して不安げにうなずいたが、そこに集まった多くの労働者——その大部分がインドから送られてきたインド人クリーだったので一笑に付した。彼らはジャングルに棲む虎の恐ろしさは十分に知っていたが、ライオンは虎よりもずっと意気地なしだと思っていた。

ヘラシシギの不安は的中した。ダルカンスは商売に夢中になって、翌朝はやく傷ついた鬘のライオンを追っかけなかったで、肩のところを射貫かれて、三日間を近くの藪の中で身うごきもせず呻いていた負傷者は四日目になって、ふらふらになりながら遠くへ移動していった。

ダルカンスが再びそこを訪れたのは中一日を置いた次の日だった。

「ここで苦しんでいやがったんだ」

ダルカンスは藪の中に滲みこんでいる夥しい血の痕を見つけて仲間告げたが、釣り落した魚が大きかった、というだけで、それっきり彼はそのライオンのことを忘れてしまった。

傷つけられたライオンは、そのあとさらに一週間を呻き

続けた。野生の強靱さがなかったら、とうに彼の生命の灯は吹き消されていたに違いない。

彼の灯はいく度か吹きこんでくる風にゆらぎ、消えそうになったが懸命に生にしがみついた。傷の痛みがうすらぎ、彼が病の床からひよろひよろと起き出してきた時は、彼はすっかり痩せ衰えていた。

彼はひどく餓えていた。そして渴いてもいた。彼は川に降りて、泥水をビチャビチャと音をたてて腹いっぱい飲んだ。

次にすることは肉を得ることだった。だが彼の体力はまったく消耗しており、その上にひどいびっこをひいていた。

彼は、眼の前に現われた多くのカモシカたち——インバラや、ブッシュバックや、ウオーターバックや、ゲレナックを捕えようとしたが、体が思うように動かなかった。ちよろちよろと藪から飛び出してくるネズミ鹿ですら捕えることができなかった。

彼はうろつきまわった。生にしがみついたための必死の努力だった。野性の世界では傷つくということが多くの場合、死に直結している。黒い死の翳が彼の周囲をとびまわっていた。

彼はその日の夕方、やつとの思いで、数日前に仲間が殺した腐敗したキリンの屍を見つけた。ハイエナやジャッカルがさんざん荒らし、ハゲコウやハゲワシがつつきまわ

して、ほとんどもう食べるところの残っていない残飯を、彼はひもじさの余り、がつがつとかじった。彼が顎を動かすたびに青蝇がもの凄^{あさま}しい羽音をたてて彼のまわりを飛びまわり、鼻をもぎとるような死臭の中から、白くてまるまると太った蛆がばらばらとこぼれ落ちた。ハイエナやジャッカルでさえ見向きもしない骨にしゃぶりつかねばならない彼には百獣の王としての面目なんかひとかけらもなかった。その翌日の午後、彼は干からびて水の少なくなつた川のほとりで洗濯にきた黒人の女に逢つた。それは鉄道工事人の女房だつた。彼女はライオンが多いことは知っていたが、昼間のライオンは猫のようにおとなしくて人間を襲うものでないと思ひこんでいたので、たつた一人で川へきたのだつた。

傷ついた牡ライオンは、二本足の動物が獲物でないことを百も承知していたが、餓えと傷とに悩まされた彼には、背に腹はかえられなかつた。平和協定は人間の側から破棄したので、飢餓のために一そう敏感になつてゐる鼻孔に人体から発する新鮮な肉の匂^{にお}いが伝わつてきた。彼は、生まれて初めての犯罪を犯した。

工事人の女房の姿が突然に消えたことは、基地でちよつとした話題になつたが、おおかた男でもつくつて逃げたのだらうということで、誰も彼女を傷ついたライオンと結びつけた者はなかつた。

いや、誰も……と言つてしまつては語弊がある。石工頭のヘラシンギだけは、ライオンの復讐が始まつたのだ、と仲よしのウンガンシークに告げたのだがウンガンシークは、

「ライオンが復讐するだつて……？」

とばかにしたように鼻を鳴らしただけであつた。

三日して、こんどは炊事に行つた若い土工の姿が消えた。彼は独身者で、しかもさらわれた女房の近くのキャンプに泊まつていたので、彼が工事人の女房としめし合せて駆け落ちしたのだ、と見られた。

労働者の脱走はこれまでも始終あつて、突然に居なくなつたという報告は度重なつていたので、この二人だけが特に問題にされなかつたというわけではない。

そのあとちようど一週間目に、こんどはギリシャ人の旅商人が襲われた。この不幸なギリシャ人はたつた一人でロバに乗つてサバンナ地帯をやつてきて、人気がないところで襲われたので、彼も殺られたのだといふことはずっと後になるまでわからなかつた。

傷ついた牡ライオンは、最初のうちこそ恐る恐る犯行を重ねていたが、四人目からは次第に大胆になつてきた。彼は強い敵だと思つてゐた人間が案外にもろく、無抵抗で、縞馬やウシカモシカほどの反撃もしてこないのにびっくりすると同時に、軽蔑した。それに人間の肉はカモシカにも劣らず美味であつた。

彼は新しい獲物の肉を二頭の妻に分けてやった。妻たちも、あの二本足の動物が、これほどいけるものとは思っていなかったの、見なおす気持ちになった。

のろまで、無防備で、無用心で、無力な、しかも決して不味くない獲物がこんなにもごっそりと群がっている以上、なにも苦勞して逃げ足のはやいキリンや、縞馬や、カモシカを追つかける必要はなかった。事実、槍のように鋭くて長い角をもったオリックスに脇腹をつき刺されて死んだ若いライオンがいたし、とびかかろうとする一瞬前に縞馬に蹴上げられて顎を砕いて死んだ年寄りライオンもいた。対草食獣の場合、勝利が常にライオンの側にあるとは限らなかった。

二頭の牝は、思いきって、傷ついた牡について、彼のやり方を見ならうことにした。ライオンの社会では牝が獲物をとりに働きに出て、牡が子どもたちと留守をまもるのが普通である。だが、どこにも例外はある。この場合がそうであった。

傷ついたが故にひとりぼっちになり、生きてゆくために獲らえようと努力し、とり易い人間を襲うようになった人喰いはまったく新しい知識と方法をライオン社会にもたらした一種の先覚者であった。その体得した生活の智慧を、仲間——ことに牝たち——に指導したとしても、それは決してルール破りというのではない。

二頭の牝ライオンにとっては、人間の肉は初めてではな

かったが、人間を襲って殺すということは初めてであった。それだけに緊張して牡ライオンについていった。

牡ライオンはキャンプ地の周辺まで近よると、そのブッシュに潜りこんでじっと闇の中を見守りかした。

キャンプのところに赤々と火が焚かれ、宵の口らしく人間たちのざわめきが伝わってきていた。

二頭の牝ライオンたちも、牡に見ならって土の上に腹ばいになり、鼻をあげてひくひくと匂いを嗅いだ。

風は死んでいるようであったが、微かに流れていて、陽炎のようにキャンプからもえ上がる新鮮な肉の匂いを、運んできた。

牝ライオンたちは二日ほど何にも喰っていなかったの、空腹でグウグウと腸が音をたて、胃の腑は黄水ででききりと痛んだ。

しかし牡ライオンは辛抱よく待ち続けた。

夜が深くなつて、星の輝きがました。キャンプからは屋間の疲れを告げる鼾の音以外になにも聞こえなくなった。

牡は、そこでのっそりと身体を起こした。牝二頭も続いた。

途中でケープルが半捲きにされたウインチが置かれてあった。見たこともない奇妙な道具に、牝ライオンはぎょつとして背毛をたてたが、牡はなれきった態度で、しかも極めて慎重に足音を忍ばせて一番手前のキャンプに近よっていった。

キャンプからは、ますます強く肉の香が漂っていたが、牝ライオンたちにはキャンプそのものが不安で、近よってゆく牝ライオンの背後七、八メートルのところに立ちどまり、夫の行動を見守っていた。

火も恐ろしいものの一つだったが、薪をくべ忘れたために、それは既に消えかかっていた。暗闇に困難を感じない牝ライオンたちには、キャンプの入口に近づいた夫の尾の先が歓喜の緊張で蛇のようにうねうねと動いているのが見えた。そこはウンガンシークのキャンプだった。

Shetani (悪霊)

ワ・タイカ族には一つの迷信があった。彼らの聖なる祈禱師が、タイタ高原に育つ神の木を燃してつくったという黒い粉をひたいに塗っておくと、獣の害を免れるというのだった。その神の木がどんな植物であるかは、ウンガンシークも知らなかった。しかし、彼は牛の角でつくった薬いれにその粉を入れていて夜になるとちょっぴり出して、自分のひたいに塗った。

その迷信からだけではなく、自分は誰よりも強いのだという自信と、部下を信頼させるにはまず上に立つ者が擁護者にならねばならないという信念とから、彼はいつもテントの入口に眠った。

この夜も六人の人夫たちを奥に寝かせ、彼は外に頭を向

けて大きな薪をかいていた。

六人の土工のうちの二人が、

「コロ！（放せッ）」

と叫ぶウンガンシークの叫び声で眼がさめた。びっくりして見ると、ウンガンシークの大きな体が、もの凄いい力で表の方にひきずられてゆくところだった。ウンガンシークがふりまわす腕が触って、テントが大きく揺れた。

眼ざめたばかりのぼんやりとした頭には、ウンガンシークが何か冗談をやらかしているのだと思えたが、次の瞬間、大きな猫の咽喉の奥から発するゴロゴロというぶきみな含み声を聞いて、すべてがはつきりした。二人は金切り声をあげて、毛布にくるまっている仲間を叩きまわった。

その間にもウンガンシークと人喰いとの格闘は続いていた。ウンガンシークは左半身を上にして眠っていたので、いきなり左肩をくわえられた。彼は曳きずられながら自由になる右手でライオンの頭を殴り、押し放そうとした。ふかふかとした鬚が手にさわった。彼はその毛を掴んだ。ウンガンシークは素手でしばらくの間、ライオンと闘った。

闘いながら彼は短刀のことを思い出した。急いで腰に手をやった。起きているときはいつも腰につけている短刀も、就寝中だったので枕もとに置いたままになっていた。武器がないとわかると気丈な彼は、ライオンの眼玉をつぶそうとして指で眼をさぐった。人喰いは彼の指が眼にふれ

たとたん獲物をほうり投げた。

このとき、六人の人夫たちがテントの外にとび出してきて空罐でも叩きながら大騒ぎをしたなら、ウンガンシークはあるいは助かっていたかも知れないが、人夫たちは恐怖心が先に立って、テントから出ようとしなかった。

ウンガンシークは喚きながら立ち上がろうとしたが、咬み砕かれた肩に力が入らなかつた。人喰いはふたたび襲いかかり、立ち上がろうとして腹這いになっていたウンガンシークの体に跨がるようにして一撃を加え、首すじに牙を埋めて荒々しく押えつけた。

テント村であかあかと火が焚かれ、人々が本格的に騒ぎだしたのは、ライオンたちの吼え声が遠のいて二十分もしてからだった。

所長のハルスレンのテントにも、その知らせはすぐに來た。彼は太急ぎで服を着て、ライフルを持って外に出た。出かけるとき、彼は妹のミッシェルに、

「決してテントの外に出てはいけないよ。もうすぐ夜があるし、みんな騒いでるからライオンが再びやってくることはないだろうが、用心にこしたことはないからね」と注意した。それから所長づきのアフリカ人召使いであるマブルギを呼んで、もっと火をどんどん焚いて見張りを

嚴重にするように命じた。

ウンガンシークのテントのところへ行ってみると、彼の

大きな体を曳きずった跡が砂の上に十メートルほど続き、そこでかき乱された大地に夥しい血がこぼれ、ウンガンシークが、いかに必死の抵抗を試みたかを物語っていた。そこから先は三頭のライオンの大きな足跡と、その一頭にくわえられて曳きずってゆかれる際にウンガンシークのかかとがつけた二本の平行線が残っているだけだった。

「気の毒に……」

とハルスレン所長は痛ましげに呟いた。ブルックもヒューブナーやファウルたちと銃をもって駆けつけてきたが、「夜の追跡は危険ですから、夜が明けたら搜索隊を出しましょう」

と言った。

一時間もたたないうちにアフリカの莊嚴な夜明けがやってきた。待ちかねていた搜索隊が朝露をふんで出発した。隊長にはハルスレン所長が自ら当たり、インド人工事監督員のバレンチやスプナー、それにウンガンシークと仲のよかつた石工頭のヘラシンギやアフリカ人労働者たちが加わった。

ウンガンシークのかかとがつけた二本のレールと血の滴りがあつたので追跡はそう困難ではなかつた。

ライオンは幾度も立ちどまり、追跡者があるかどうかを警戒した形跡が、ところどころで見られた。最初にウンガンシークを襲った奴が最後まで彼をくわえ続けたことも足跡から推察できた。

アンブレラ・アカシヤの疎林と刺の木の灌木がいりまじって、どこに大きな猫たちが潜んでいるかわからないぶきみなサバンナを歩いてゆくことはこういった場合あんまり気持のいいものではなかった。

ガサガサツと音がした。ハツとしてハルスレン所長が身構えると、喪服を着たように黒い羽毛に蔽われ、眼のまわりと咽喉にかけてただれたように赤い血の色を見せた平原犀鳥が八羽、葬送の行列よろしく一列になって歩いてくるのだった。

ヘラシギはそれを見ると嫌な顔をして石をぶっつけた。彼は親友の死に万一の僥倖を願っていたから不吉な鳥として憎んだのだった。しかし、それもさらに一キロ進んだところで、はっきりした。

先頭を歩いていたハルスレン所長が背黒ジャッカルが袋のようなものをくわえて走っているのを見つけて、一発射ったときである。

ジャッカルは獲物を捨てて逃げ去ったが、拾いに行った労働者の一人が、

「ブアナ（旦那）ッ……」

と悲鳴に近い叫びをあげた。それは切りはなされたウングンシークの首であった。首は後頭部にあけられた四本の牙の痕跡以外まったく無傷だった。ヘラシギはかけよって涙をばらばらこぼしながら頬やひたいについている血と泥を掌で拭きはじめた。

ハルスレンはその手に腰の水筒の水をかけてやり、それから皆に近くを捜してみることを命じた。

ウングンシークの悲しい亡骸はすぐに見つかった。朝はやかっただけで眼の鋭い禿鷲にいついばまれていなかったことは幸いだったが見るかげもなく喰い荒らされ、小さな肉片と大きな骨とが散らばっているだけだった。三頭のライオンが、ウングンシークの体を引っぱり合って、ひきちぎった形跡もはっきりと残っていた。

ライオンの癖として、頭と手足の先は食い残すのだが、ウングンシークも例外でなかった。

一同は、残された指と、くるぶしから先の足と、骨とを頭と共に箱につめてしょんぼりとキャンプにもどった。

ウングンシークの死によって、人喰ライオンが出現したことがはっきりし、行方不明のために駆け落ちをしたのだろうといわれていた工事人の女房たちも、もしかしたらライオンにさらわれたのかも知れない、ということになった。

とにかく、圧倒的に勢力すぐれていたウングンシークが殺されたということは鉄道労働者たちには大きなショックとなった。

しかし、たとえ人喰ライオンが現われても、工事は予定どおり進行させねばならなかった。小乾季は一、二ヵ月で終わろうとしている。東アフリカでは小乾季は三月で終わる、四月ごろから大雨季が始まる。大雨季は約四ヵ月続き、

七月の末になって大乾季に移行してゆく。乾燥季には一滴の水気もなく、からからに干あがつていた川も池も、雨季となるとみるみる水面を復活させ、膨張させ、果ては大洪水までひき起こす。それは人の手が加えられていないアフリカの大自然が持つ暴力であった。

雨がくると枯れきったように見えていた草原がいつせいに息を吹きかえして、青々とした芽えをみせる。しかし、次の瞬間には、どろどろの渦をまいた濁水が押しよせてきて低地という低地を水びたしにする。低い道はすべて川になり、交通は寸断される。

ましてサボ川のように、乾季でも流れを残している大河は、雨季には数倍にふくれ上がり、河幅は広くなり、流れも速くなる。瀑布が生じ、幾百本もの支流が出現する。

そうなつては工事はお手あげで、次の乾季が始まるまで待たねばならない。

「とにかく雨季が始まるまでに橋だけは架けておかねばならない。工事人たちが人喰いの出現で少し怯えているようだからその対策を練るとして、工事だけは予定通り進めてほしい」

ハルスレン所長はブルック技師長以下の技術指導者を集めて言った。

最初に考えられた防衛策は、この付近の住民たちが何千年の昔からやってきている方式を採用することだった。それはボマを作ることである。

原住民たちは自分たちの粗末な家を猛獣から護るためにアカシヤや、その他の鋭い刺のある木の枝を伐ってきて家の周囲をかこんでしまう。これはボマと謂われていた。

ばらばらにテントが分散しているのも防衛の面からいって都合のわるいことだったので、五、六張りずつのテントを一ヵ所に集めてボマを作ることを命じた。

だが、すべての点でてきばきと行動をしない労働者たちは、ボマが出来上がらないうちに次ぎつぎと襲われ、さらに三人がさらわれた。

ハルスレン所長はインド人の工事監督員たちに鉄砲を渡し、キャンプ地区の見張りをさせたが、人喰いは利口な奴で、同じ場所を続けて襲撃するといったへまはやらなかった。ライオンは人間の防衛方法をちゃんと呑み込んでいるかのように、見張りが待ちかまえたテントを避けて、ちがったテントを襲った。

最初のうち襲撃は四、五日おきであり、必ずしも成功するとは限っていなかった。しかし、日がたつにつれて襲撃は三日おきになり、隔日となって、最後には毎晩どこかのテントが狙われるようになった。

びくびくもので忍んできていた人喰いは、襲撃になれるにつれて次第に大胆となった。最初は食糧確保の手段として行なっていた犯罪はこのごろでは彼らの楽しいゲームになってきたようであった。

人喰いが何頭であるかわからないが、ウンガンシークが